

日本語版刊行にあたって ― ヒア・バイ・ライトって、なんだろう？	4
用語・略語集	8

第Ⅰ部 ヒア・バイ・ライトおよび関連文書の紹介

ヒア・バイ・ライトの紹介にあたって	10
1 ヒア・バイ・ライト 2008	11
子ども・若者の参画のためのスタンダード Hear by Right 2008	
2 プレゼンテーション用資料	40
Hear by Right Presentation	
3 参画のスタンダードをつくる(子ども・若者向けパンフレット)	44
Building the active involvement of children and young people	
4 参画のスタンダードをつくるー素材集	48
Buildind standards Resource Pack (2006)	
5 マッピング&プランニングツール	68
Hear by Right Mapping & Planning Tool	
6 ここが変わった！参画による変化を記録するツール	84
What's Changed Tool	
7 ここが変わった！参画による変化を記録するツール(子ども・若者向け)	88
What's Changed Tool Children and Young People's Version	
8 子ども・若者の参画のために 一手引書	91
Involving children and young people — an introduction	
9 事例	102

第Ⅱ部 ヒア・バイ・ライトの背景

はじめに	118
第1章 子ども・若者の参加が注目されるようになるまで	119
ーイギリスの歴史に見る権利の変遷ー	
1. 産業革命以前(～18世紀初頭) ― 子どもは労働力	
2. 産業革命期(18世紀中盤～) ― 都市化の進展と工場で働く子どもたち	
3. 産業革命の終焉(19世紀中盤) ― 教育を受ける権利の制定と子どもたちの反乱	
4. イギリスの帝国主義(20世紀前半) ― すべての子どもを対象にした権利の制定	
5. 第一次世界大戦の終結 ― 子どもの権利についての国際的な共通認識の誕生	
6. 世界恐慌～第二次世界大戦 ― ユースサービスへの行政の取り組みの開始	
7. 戦後労働党政権 ― 子どもの権利の保障とユースサービスの拡大	
8. サッチャリズム(1980年代) ― 福祉国家から小さな政府へ	
9. サッチャー政権の教育改革	
10. ニートの登場	
11. 子どもの権利条約の誕生	
12. プレア政権の第三の道「Education、Education、Education」 ― 教え、育むこと	
第2章 イギリス子ども政策の現状	128
ーECM どの子もみんな大切ー	
1. 「ECM」策定と政策の流れ	
2. 「2004年英国児童法」Children Act 2004	
3. 政府政策「ECM 子どもたちのための行動計画」Every Child Matters ―Change for Children	
4. 「若者プラン ― 若者の自己実現に向けて」Aiming High for Young People	
5. 「子どもプラン」The Children's Plan	
6. まとめ ― 子どもの声を聴く	
第3章 座談会 日本における子ども・若者の参画の可能性を考える	142
汐見稔幸氏、宮本みち子氏、奥田陸子・小島 紫・伊藤一美(特定非営利活動法人子ども&まちネット)	
第Ⅱ部参考文献	160
あとがき	161
この本に掲載した主な機関の紹介	162

<見出しシート> と <指標カード>



共通の価値観

shared values - what everyone believes

だれもが大切だと思うこと

私たちが参画するときは、みんながきちんと対等に、誠実にあつかわれ、情報もきちんと公開され、共有されることが、大事なことだね。この考え方を、みんなが持っていないとちいけない。



これじゃあ、だめだよ

『参加した人に順序や上下があります。これしちやいけない、これはだめ、などのきまりがあります。』

「共通の価値観」をすすめるために～レベルごとの指標

共通の価値観 1.1	大人は私たちの意見をちゃんと聴いて、真剣にとりあってくれるよ。 参画にむけて動き出した段階 (Emerging)	
共通の価値観 1.2	何をしたら評価してもらえるのか、どうやって参画したらいいのか、そんなことがちゃんと決まってるから、わかりやすいんだ。 参画にむけて動き出した段階 (Emerging)	
共通の価値観 1.3	私たちは私たちに「権利」があることを知ってる。大人も私たちの「権利」を大切に思っていて、私たちにちゃんと説明してくれるよ。 参画にむけて動き出した段階 (Emerging)	

shared values - what everyone believes

共通の価値観 1.4	私たちは、大人といっしょに、参画のルールをチェックしたり、それでいいかどうかを話し合ったりする。 参画が実現している段階 (Established)	
共通の価値観 1.5	大人が私たちの意見をちゃんと聴くことは当然だってこと、みんなちゃんとわかってる。 参画が実現している段階 (Established)	
共通の価値観 1.6	近くで活動してるグループも、私たちが参画することに賛成だよ。 さらなる取り組みの段階 (Advanced)	
共通の価値観 1.7	子どもの参画に取り組んでいるグループはみんな、子どもや若者がどうやって参画しているか発表しなきゃ。 さらなる取り組みの段階 (Advanced)	
共通の価値観	<自由記述欄>	
共通の価値観	<自由記述欄>	

第 3 章 座 談 会

日本における子ども・若者の参画の可能性を考える

私たちは「*ヒア・バイ・ライト* (*Hear by Right*)」の翻訳作業のかたわら、日本の子どもたちのことをいろいろと話しました。赤ちゃんといえども自分を主張していること、しかし多くの大人はそれをしっかり受け止めてはいないことを。そして、本書を出版することで日本の社会が変わるだろうかと。

本書を書き進めるうちに、日本とイギリスとの文化の開きがあまりにも大きく、このような本を出版したぐらいで、すぐに変わるものではないことは痛いほどわかってきました。いったいなぜ日本とイギリスはこうも違うのか。それでも、この本を日本に紹介する意

味はあるのか。そのような視点で、有識者の方のご意見を伺いたいと、次第に思うようになりました。

そこで、教育哲学の専門家であり、幼児教育にも精通しており、その分野ではオピニオンリーダーである汐見稔幸先生と、社会学者であり、世界の青年問題を研究しておられる宮本みち子先生にお話を伺うことにしました。お忙しい二人の先生に「*ヒア・バイ・ライト*」について話し合っていただけたことは、とても幸せでした。お二人の言葉は、とても含蓄があり、これだけでも世に出す価値があるくらいだと、お二人に感謝しております。

＜出席者＞

汐 見 稔 幸 氏 （白梅学園大学学長・東京大学名誉教授）

宮 本 み ち 子 氏 （放送大学教養学部教授）

司 会：奥田陸子、小島 紫、伊藤 一美（子ども&まちネット）

日時：2008年5月27日

場所：白梅学園大学・短期大学 現代GP
西新宿サテライト



司会：乳幼児期の子どもの育ちや日本の少子化対策にお詳しい汐見稔幸先生に、また若者に対する施策で世界の状況にお詳しい宮本みち子先生に、『*ヒア・バイ・ライト*』をご覧いただき、ご意見をいただきたいと思って、お集まりいただきました。お忙しいところ、どうもありがとうございます。さっそくですが、ご感想はいかがでしたか？

1. *ヒア・バイ・ライト*を使った評価の手法は、日本の現実とはかけ離れている

汐見：*ヒア・バイ・ライト*を読んだだけでは、子どもの参画、子どもの意見を聴くということはなかなか簡単にイメージできないかもしれないですね。

宮本：レベルというか、日本との進み方が全然違うように思います。*ヒア・バイ・ライト*がどういう場面で使われるのか。日本の現実とはかけ離れているので、にわかにはわからないだろうなと思います。

司会：私たちにもわかりにくかったのは、*ヒア・バイ・ライト*の目的が、「子どもの参画」そのものにあるということ。事業の質を上げるとか、何か目に見える成果を上げるために、「子どもの参画」を進めるのではなくて、「子どもの参画」そのものが目的だということでした。翻訳していても、その点を理解するのにずいぶん時間がかかりました。

スレア政権以降、評価の歴史が復活

宮本：イギリスと日本では、社会のあり方に大きな違いがあるんですね。イギリスでは、アセスメントをやりすぎかと思うくらい厳しくやります。国、地方自治体、学校、子ども関係の専門機関で、すべてのことがエビデンスベース^{*}であり、すべてが数値化され、評価シートができています。予算をいくらかけて、何がどう変わったか、それに書き込んでいくことによって、次年度の予算が付きます。

その流れのなかで、子どもの参画においては*ヒア・バイ・ライト*がつくられ、各部署で実際に使われているのだろうということは、イメージできますね。

2007年に、イギリスのバーミンガムに調査に行ったら、「行政評価を行なうときに、『何をやったか』ということを入力する必要はない。それよりも、『どんな成果が上がったか』が重要だ」と言っていました。日本では普通、事業に対して「何人集まったか」などが重要な評価点になります。イギリスでは、関わった住民が「どう変わったか」が大事で、それだけでいいと言っていました。

イギリスでは、あらゆる関係部署に評価シートが降りていっています。関わる人も多く、担当者シートに記入に追われ、行政のなかでは不満も出ているようでしたが、そういう調子で1年間やったあとでは、部署内の文化が変わるぐらいの変化が見られたという話も聞きました。

エビデンスベース：事業の計画や業績評価を行う際に根拠をはっきりさせるやり方